

## 詩編 第120編 1節

「苦しみのうちに、私が主に呼ばわると、主は私に答えられた。」

苦しみは必ず、いつかは、誰をも襲う。いま苦しみの中にいない者にも襲いかかるときがくる。すでに苦しみにある者に追い打ちをかけて、さらなる苦難が襲うこともある。誰もが一つや二つの苦しみを体験している。

ここでは、苦しみのうちに、とある。昨日のものでもなく、また将来予測されるものでもない。今まさに苦しんでいる者からの声である。その声は、ただ一つ、主を呼ばわる声である。苦しんでいるからこそ、呼ばなくてはならない、必死の叫びである。その叫びを聞かれるお方を主と呼ぶ。主と呼んだとき、何かが起こる。主だからである。この苦しみにさえ、ご支配されておられる主である。この苦しみにある、私のすべてをご存じて、支え、導き、歩みを完成してください。主である。

主と呼んだばかりか、私は、私の叫びにお答えになる主を体験している。この叫びのいっさいを受け止めてくださる主を体験している。受け止めるどころか、苦しみの私を、主の懐に抱いてくださる。そして、導く主だ。

私は苦しみの中で、主の恵みの温もりに与った。